令和２，３年度　共同研究「研究テーマ」

児童生徒が主体的に取り組む特別活動に関する研究
～望ましい学級集団づくりを通して～

近藤　基子（報徳小）　髙橋ひろみ（白鷗中）
石井　槙子（城北中）　髙橋　修司（山王小）
瀬戸根優記（橘中）R3　栗飯島正義（橘中）R2

テーマ設定の理由（なぜ今特活か？）

＜学習指導要領から＞
学習指導要領の総則でも改めて学級経営の大切さが記されているが、特別活動で「学級」を単位として、多様な集団活動を行うことは、支え合い、高め合う「望ましい集団」としての成長を促すことができ、学級経営の充実と深くつながっている。

＜全国学力・学習状況調査から＞
自治的な学級活動についての質問紙項目の結果から、児童生徒の意識と、指導者の意識の差が大きいことが明らかになっている。**指導者が意識を改善し、児童生徒の集団の形成者としてより良い学級や学校生活を作り出す工夫をしていく必要がある。**

＜いじめ・不登校に対する視点から＞
学習指導要領解説の中で、「学級の集団づくりは、児童一人一人のよさや可能性を生かすと同時に、他者の失敗や短所に寛容で共感的な学級の雰囲気を醸成する」と示され、特別活動の充実はいじめや不登校が起こりにくい学級づくりにつながると考える。

研究の目的

特別活動における学習過程の様々な場面で、児童生徒が主体的に行事や学級活動に取り組み、集団（社会）の形成者として、見方・考え方を働かせながら仲間と関わり、合意形成をしたり、良さを認め合ったりする活動を位置付ける必要がある。学級活動や行事、児童会活動をどのように展開したら児童生徒が主体的に取り組むことができるのだろうか？指導のポイントを整理すると共に、指導のポイントを踏まえた実践を積み重ねることを通して、児童生徒が主体的に取り組む特別活動の指導について明らかにしていく。

研究の方法

テーマにせまる手立て　その１

「児童生徒自身のＰＤＣＡサイクルを回す」

児童生徒自身が、目的を共有し、そのためにどうするのか、計画を立て（Ｐ）、実行し（Ｄ）、振り返り（Ｃ）また、その振り返りから、さらに次に「生かす」（Ａ）ことで、主体的で望ましい集団活動が作られる。しかし、１度の取組で、特別活動で育みたい資質・能力を身に付けることは難しい。児童生徒の声から「次はここを改善してこんな風にしてみたい。」「次にはこんな活動をしてみたい。」と、**一つのＰＤＣＡが次のＰＤＣＡにつながっていくことに着目し、一つの題材の中で、または年間を通して内容を関連させること**で、望ましい集団としての成長が期待できるのではないかと考えた。

テーマにせまる手立て　その２

「自己肯定感を育む自治組織づくりをすること」

特別活動では、特に学級活動を中心とした自発的自治的な活動を通して、児童生徒が、協力し合い、互いに認め合う中で、自分が他の人の役に立つ存在であることに気づき、自分の良さや可能性を感じることができる。協力し合っている活動の最中には、夢中で気付かないことも、振り返りの場面では、教師の声かけやワークシート、他己評価など、様々な工夫によって自分の良さや可能性に気づくことができる。そこで、**各題材の中の「Ｃ」の部分にあたる「振り返りの場面」を大切にし、工夫を図っていく**ことにした。

テーマにせまる手立て　その３

「児童生徒にとって必要感のある話し合いの場（合意形成の場）を持つこと」

話し合いを通して、他者の様々な意見に触れ、自分の考えを広げたり、課題について多面的に考えたりすることが、他者の良さに気づいたり、集団としての良さを感じたりすることにつながる。そして、「話し合ってよかった」という思いが、次の話し合いへの意欲につながり、望ましい集団としての成長につながっていくだろう。**学級の仲間との合意形成の場が有意義なものであるためにも**、「これについてはどうするのか？」「どうすれば実現できるのか？」など共有する課題に向け、**話し合いの場が、児童生徒にとって本当に必要であるか？を考えながら単元の中に適宜位置付ける**ことにした。